

2012 年度春学期「にほんご わせだの森」実践報告

松本 裕典・角浜 ひとみ

1. はじめに

「にほんご わせだの森」(以下、「わせだの森」)は、早稲田大学大学院日本語教育研究科(以下、日研)の大学院生らが作る地域日本語教室であり、「地域」と「日本語教育」をめぐって、院生が自ら考え自ら実践を組み立てていくことを課題(池上 2009: 165)とする実践の場である。

この教室の特徴として、主に次の三点が挙げられる。特徴の一つ目は、大学院の授業の一環として開かれているという点である。日研の実践研究科目¹の一つである「日本語教育実践研究(1)」の教育実習クラスとして開講されている。そのため、早稲田大学を教室の場所とし、定期的で開催され、原則無料で行われる。特徴の二つ目は、「わせだの森」には、「教師」はおらず、いつでも参加可能な自由な教室形態であるという点である。ゆえに、1回だけの参加者もいれば、期をまたがって継続する参加者もいる。特徴の三点目は、参加者の制限をできる限り排除するという点である。基本的には参加者の国籍、母語、性別、年齢、職業、日本語レベルなどの一切を問わない。「わせだの森」は以上の三点の特徴を持った新しい形の地域の日本語教室である。

「日本語教育実践研究(1)」および「わせだの森」は、2006 年度春学期から開始され、以降半期ごとに担当する院生(実習生)は交代するものの、上記の三点の特徴を概ね共通とする教室として 2012 年度春学期現在まで継続して行われている。ただし、上記の三点の特徴もあらかじめ決まっている枠組みではなく、2006 年度春学期から少しずつ変化を遂げてきているものである。また各期の活動理念や活動内容などは担当する実習生らが話し合いをしながら、ゼロから作り上げていく。本稿では、筆者らが実習生として担当した 2012 年度春学期の「わせだの森」の実践報告を行う。

2. 実践概要

本章では、2012 年度春学期(以下、12 春)の「わせだの森」の詳細な活動内容をまとめて報告する。報告は主として、12 春の授業期間中に実施した春の森についてであるが、春の森の実践のコンセプトと実践者を引き継いで夏休み期間中に実施した夏の森についても併せて簡単に報告する。

¹ 実践研究科目は、大学院生が履修する教育実習科目であり、日本語教育実践研究(1)～(13)までの 13 科目で構成されている(2012 年度春学期現在)。

2.1. 「にほんご わせだの森」2012年春の森

筆者らは、12春の「わせだの森」に実習生および設計者として関わった。12春の春の森の活動は、2012年5月19日（土）から7月18日（水）までの全10回でデザインしており、実習生は筆者らを含めて7名だった。活動は水曜日と土曜日の隔週で行い、1回の活動は90分で行った。土曜日の活動後にはお茶会と称して、お茶やお菓子をつまみながら参加者同士で歓談する時間も設けた。全10回の活動の概要は以下の通りである（表1）。

表1 「にほんご わせだの森」2012年春の森 全体像

活動日時	場所	内容	参加人数
①2012/05/19 15:00～16:30	22号館502教室	映画クイズ 映画①映画について話そう！	34名
②2012/05/23 18:15～19:45	22号館502教室・22号館内	猛獣狩り アウトドア①22号館クイズ大会	12名
③2012/06/02 15:00～16:30	22号館717教室・718教室	バースデーチェーン アクティビティ①他人の夢になりきって話す	32名
④2012/06/06 18:15～19:45	22号館502教室	映画クイズ 映画②映画について話そう！	17名
⑤2012/06/16 15:00～16:30	22号館502教室・501教室	部屋の四隅 本①本に関わる私の話（思い出）を話す	20名
⑥2012/06/20 18:15～19:45	22号館502教室	休日の過ごし方 アクティビティ②他人の夢になりきって話す	12名
⑦2012/06/30 15:00～16:30	22号館502教室・501教室	インターネットクイズ インターネット①Webサイトを紹介する	18名
⑧2012/07/04 18:15～19:45	22号館502教室	絵の伝言ゲーム 本②「森の『人生図鑑』」を作る	29名
⑨2012/07/14 15:00～16:30	22号館502教室・大学構内	ジェスチャーゲーム アウトドア②私の「気持ちのいい場所」探し	24名
⑩2012/07/18 18:15～19:45	22号館502教室	インターネットクイズ インターネット②スピード・トーキング	19名

以上が、12春の森の全10回の活動の概要である。これらの活動全体に共通する理念として、実習生らは「つながりをつくる」ことを掲げた。この理念に基づき、各回の活動をメインファシリテータを中心に組み立てていった。7名の実習生がそれぞれ1～2回程度メインファシリテータを担当し、各回の活動内容に応じて1～2名のサブファシリテータがついて進行をサポートした。全10回の活動には、「映画」「アウトドア」「アクティビティ」「本」「インターネット」という5つのテーマを2回ずつ設定しており、活動はテーマに基づい

て行った。このテーマは、事前にすべて実習生らが話し合いをしながら決めており、チラシに各回の活動のテーマを明記した。

ここまでの活動日や理念やテーマといった実践内容の決定には、「日本語教育実践研究(1)」の授業時間内外で幾度も話し合いを重ねた。まず7名全員が「私が作りたい教室」という小レポートを提出するところからはじめ、それぞれの教室のデザイン案を見比べながら、それらに概ね共通している「つながりをつくる」を実践の理念とするに至った。「つながりをつくる」という理念のもと、それぞれのデザイン案をテーマという形で抽象化し、テーマを設定した。実際の活動の具体的な内容はそのテーマをもとに活動前の授業時間内外で話し合いながら練り上げていくという方法を採用することにした。

活動は毎回、概ね、受付⇒アイスブレイク⇒本活動⇒クロージング⇒お茶会という順番で展開された。表1の「内容」の上段がアイスブレイク、下段が本活動のテーマと内容を示している。また、これらの活動以外にも土曜日には子ども向けの活動や「森の相談コーナー」を用意した。子ども向けの活動では、積極的に子どもの参加を歓迎し、大人の活動との連携や共通性をできる限り意識して担当を配した。お茶会の時間に併設する形で開設した「森の相談コーナー」では、生活上の相談や学習上の相談などよろず相談を承る形をとった。

次に参加者数についてである。参加者には12春の活動にはじめて参加するときに受付で個人情報の扱いや記録としての写真撮影等についての同意書を記入してもらった。それによると第10回の7月18日(水)の時点で記入者は133名を数えた。第1回から第10回までの合計参加者が延べ217名だったことを考えると、全体を通して初めて参加する人のほうが多かったということになる。参加者の属性は学内外、老若男女を問わず多様であった。主な属性としては、日本語学校の学生・先生、大学院生、早稲田大学の別科生、親子、年配者、ビジネスマン、日研生などである。

2.2. 「にほんご わせだの森」2012年夏の森

授業の一環としての「わせだの森」は春の森でいったん完結したが、実習生7名のうちの3名とボランティアとして春の森の活動に参加してくれた日研生有志によって引き続き夏休み期間中に夏の森を開催した。夏の森は、2012年8月8日(水)、22日(水)、9月5日(水)、19日(水)の全4回のスケジュールで実施した。活動全体のコンセプトや理念は春の森から引き継いでおり、活動形態も概ね踏襲している。全4回の活動の概要は以下の通りである(表2)。

表2 「にほんご わせだの森」2012年夏の森 全体像

活動日時	場所	内容	参加人数
①2012/08/08 18:30~20:00	22号館 717教室	ジェスチャーゲーム スポーツについて話そう!	12名

②2012/08/22 18:30~20:00	22号館 717 教室	絵の伝言ゲーム 「私が一番〇〇だったとき」	23名
③2012/09/05 18:30~20:00	22号館 717 教室	有名観光地名前当てクイズ 旅行した／したい場所について話し合う	12名
④2012/09/19 18:30~20:00	22号館 717 教室	仲間探しゲーム あなたがなくした大切なものは何ですか？	10名

以上が、夏の森の全10回の活動の概要である。表1と同様に表2も「内容」の上段がアイスブレイク、下段が本活動の内容を示している。夏の森では、春の森とは異なり、事前に活動のテーマを決めて、参加者に知らせるということはしなかった。

夏の森には、12春の実習生ではない日研生2名も有志として、それぞれ1回ずつメインファシリテータを担当してくれた。「わせだの森」では、実習生以外の日研生がよくボランティアや参加者として活動に参加してくれるが、12春では、実習生が多かったことと授業という性質上、学期中の活動では、メインファシリテータを実習生以外に任せるということはしなかった。そのため、夏の森では、希望者を募り、実習生と有志とで一緒に作るということに挑戦した。

夏の森でも、春の森同様に春の森から通算してはじめて参加する人には同意書を書いてもらった。全4回を通じて計36名の新規参加者があり、夏の森の延べ参加人数57名から見て、やはりはじめて参加する人のほうが多かったことになる。さらにいえば、春の森からの継続参加者も数人いたが、夏の森から新しく参加してくれた人の割合も高かった。春の森からの通算で169名、延べにすると274名の参加者があったことになる²。

ここまでが、2012年春の森および夏の森の実践報告である。次章では、実践の一部として実習生らが力を入れた広報活動について報告していく。

3. 森の広報活動

12春森の特徴のひとつとして、広報活動に力を入れたことが挙げられる。広報活動に力を入れたことの意味付けは、本誌掲載の角浜（2012）、松本（2012）に詳しい。広報物のデザインについては角浜（2012）を、広報戦略については松本（2012）を参照されたい。なお、以下で紹介する制作物はすべて本誌資料編に収録した。

3.1. 森のチラシ

角浜が描き下ろしたくまのキャラクターをあしらったチラシをデザインした。チラシは、速報的に活動日だけを記した簡易版を5月9日（水）に発行し、その後、完全版として5月12日（土）に日本語版と英語版を作成し、配布用にそれぞれカラーとモノクロを用意し

² 担当教員、実習生7名を含まず。夏の森に日研生有志ファシリテータとして参加してくれた2名は当該回のみ参加人数に含めず。

た。配布用チラシは業者に印刷を依頼し、日本語版カラー100部、日本語版モノクロ 500部、英語版カラー30部、英語版モノクロ 150部の合計 780部を発注した。

夏の森のチラシは、12 春のチラシと統一感を持たせたデザインで作成し、こちらも簡易版と完全版の 2 パターンを用意した。簡易版は 7 月 27 日（金）に、完全版は 8 月 2 日（木）に Web サイトなどで公開を開始し、完全版はカラー100部を配布用として印刷をした。

チラシの配布は、実習生らが分担して学内外で広く行った。学内では、全学オープン科目や日研の授業での配布をはじめ、掲示板などへの貼り付け、日研入試説明会や公開講座などでの配布を行った。学外では、地域センター、図書館、保育園、留学生寮、他大学、飲食店などの施設での掲示をはじめ、日本語教育学会などのイベントでのチラシコーナーへの設置を行った。

3.2. 森新聞

12 春森では、毎回の活動終了後に前回の活動の様子を写真入りで紹介した A4 判 1 枚の『「にほんご わせだの森」新聞』（以下、森新聞）を発行し、次の活動日に参加者に紙媒体で配布をするという試みを実施した。主に受付後の時間やお茶会の時間に閲覧してもらい、これまでの活動について知ってもらうことが目的であった。紙媒体と同じものはオンライン版として Web サイトにも掲載し、誰でも自由に閲覧できるようにしている。また、角浜が中心となって森新聞のポスター版も作成し、活動日に教室内の壁に掲示した。ポスター版は、単にサイズだけ大きいのではなく、参加者の成果物を貼りつけたり、紙面が広い分より多くの情報を書き込んだりと、内容面での違いもあった。なお、便宜上、配布した紙媒体を小新聞、掲示したポスター版を大新聞と呼び、区別していた。

小新聞は、次の活動日に配布する以外にも後述する「森のチラシコーナー」に継続して設置し、前回までのすべての森新聞が持ち帰れるように心がけた。大新聞は、活動日以外は早稲田大学 22 号館内に設置されている留学生支援のための部屋に掲示してもらい、来訪者の目に触れるようにしてもらった。

3.3. 森の Web サイト

「わせだの森」には従来から供用されていた Web サイト (<http://www.gsjal.jp/ikegami/mori.html>) がある。12 春の「わせだの森」では、この Web サイトの活用も重点的に行った。これまでと同様に情報発信の媒体として利用するだけでなく、松本を中心にしてコンテンツを増やしたり、過去の記録を整理したりといった技術的な面での整備も行った。上述の森のチラシや森新聞もすべて Web サイトに掲載した。さらに、広範囲にアクセスするため、ブログ (<http://ameblo.jp/2010au-mori-jissen/>)、Facebook (<https://www.facebook.com/wasedamori>)、Twitter (https://twitter.com/mori_waseda) を利用した。これらはすべて 12 春森以前から利用されており³、閲覧者の混乱を防ぐためにもアカウント等を継続

³ それぞれの導入時の活用事例については、奥山（2011）、ヘネシー（2011）に詳しい。

して利用した。各種媒体の更新は主に松本が担当し、活動日の前後を中心に頻繁に行った。

3.4. 森のチラシコーナー

「わせだの森」内の一角に誰でも自由に持ち込み／持ち帰りができる「森のチラシコーナー」を設置した。森のチラシや森新聞のバックナンバーをはじめ、新宿区の情報誌やイベント案内、学会や映画の紹介などのチラシを設置した。実践の後半では、「わせだの森」のイベント案内が掲載された『早稲田ウィークリー』（1280号）⁴も設置した。参加者からの持ち込みのチラシもいくつか見られ、毎回手に取ってチラシコーナーを眺めている参加者の姿も見られた。

3.5. 森の学会発表

12春森の実践をもとにして実習生の内5名で、次の2件の学会発表を行った。「日本語話者」というアイデンティティ「にほんご わせだの森」が目指す「つながりをつくる」ことの意味―（2012年9月9日（日）：国際研究集会「私はどのような教育実践をめざすのか―言語教育とアイデンティティ」）、「重ねた「対話」がもたらす言語教育観の更新―「つながりをつくる」ことを目指した「にほんご わせだの森」の実践のプロセスから―」（2012年9月23日（日）：早稲田大学日本語教育学会2012年秋季大会）という2件の学会発表である。それぞれの発表の要旨は、マルクスほか（2012）、松本ほか（2012）として予稿集に掲載されている。

マルクスほか（2012）では、「アイデンティティ」をキーワードに、発表者らがどのような教育実践を目指していたのかを考察することで「つながりをつくること」という教室の理念の意味を明らかにしようと試みている。その結果、ひとりの「日本語話者」として参加者を認めることで、参加者のことばとのつながりを通じた人間関係の構築を目指していたことが明らかとなっている。

松本ほか（2012）では、複数の実践者による協働実践における教室理念の解釈を確認し続け、共構築していくことにより、実践者それぞれの言語教育観の更新が起こるプロセスに着目した。さらに、そのプロセスを通して共同体としての教室の成長を考えていくことの重要性を指摘している。

4. おわりに

本稿では、12春の「わせだの森」の実践概要および広報活動についての報告を行った。今学期の実践は7名という大人数での協働実践であった。日程調整や理念の設計、活動内容の決定など各段階で多くの共感や衝突があったが、無事に授業としての実践を終了する

⁴ 学内向けの広報誌。「杜の手帳」という学内のイベント情報を掲載するコーナーに掲載を依頼した（早稲田大学学生部2012）。オンライン版<<http://www.wasedaweekly.jp/detail.php?itm=419>>（2012年9月30日閲覧）も発行されている。

ことができた。「わせだの森」で学んだ経験は、必ずそれぞれの今後の実践へとつながっていくに違いない。

参考文献

- 池上摩希子 (2009). 「教室」の解体が創出するもの——「にほんご わせだの森」の実践から考える対話の可能性. 小林ミナ, 衣川隆生 (編) 『教室』 (日本語教育の過去・現在・未来 3) (pp. 161-179) 凡人社.
- 奥山寛 (2011). 「2011 年春学期にほんごわせだの森」における SNS の活用事例『地域日本語教育実践研究』 6, 11-15.
- 角浜ひとみ (2012). 「にほんご わせだの森」における広報制作物——チラシ作成の背景『地域日本語教育実践研究』 7, 95-102. <http://www.gsjal.jp/ikegami/report07.html>
- ヘネシー・クリストファー・ロバート (2011). 「隠れた森の一面」——踏査されていない「わせだの森」実践の考察『地域日本語教育実践研究』 6, 3-10.
- 松本裕典 (2012). 実践を開くとは何か——「にほんご わせだの森」12 春の広報戦略『地域日本語教育実践研究』 7, 103-107. <http://www.gsjal.jp/ikegami/report07.html>
- 松本裕典, 角浜ひとみ, マルケス・ペドロ, 高須こずえ, 田中奈緒 (2012). 重ねた「対話」がもたらす言語教育観の更新——「つながりをつくる」ことを目指した「にほんご わせだの森」の実践のプロセスから『早稲田大学日本語教育学会 2012 年秋季大会企画・研究発表会資料集』 8-9.
- マルケス・ペドロ, 角浜ひとみ, 松本裕典, 高須こずえ, 田中奈緒 (2012). 「日本語話者」というアイデンティティ——「にほんご わせだの森」が目指す「つながりをつくる」ことの意味『国際研究集会「私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ」プロシーディング』 158-164.
- 早稲田大学学生部 (2012 年 6 月 21 日). 「にほんご わせだの森」2012 年春の森『早稲田ウィークリー』 1280, 7. <http://www.wasedaweekly.jp/detail.php?item=419>

参考 Web サイト

- 池上摩希子研究室「にほんご わせだの森」『池上摩希子研究室』 <<http://www.gsjal.jp/ikegami/mori.html>>2012 年 9 月 30 日閲覧.
- 言語文化教育研究会『国際研究集会「私はどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ」』 <<http://gbkk.jp/symp2012/>>2012 年 9 月 30 日閲覧.
- にほんご わせだの森「にほんご わせだの森 Nihongo Waseda no Mori——人とつながる*世界がひろがる」『Ameba』 <<http://ameblo.jp/2010au-mori-jissen/>>2012 年 9 月 30 日閲覧.
- にほんご わせだの森「にほんご わせだの森 Nihongo Waseda no Mori」『Facebook』 <<https://www.facebook.com/wasedamori>>2012 年 9 月 30 日閲覧.

にほんご わせだの森 「「にほんご わせだの森」公式アカウント——@mori_waseda」『Twitter』 <https://twitter.com/mori_waseda>2012年9月30日閲覧.

早稲田大学大学院日本語教育研究科『早稲田大学大学院日本語教育研究科——GSJAL日研』 <<http://www.waseda.jp/gsjal/index.html>>2012年9月30日閲覧.

早稲田大学大学院日本語教育研究科「早稲田大学日本語教育学会 2012年秋季大会」『早稲田大学大学院日本語教育研究科——GSJAL日研』 <<http://www.waseda.jp/gsjal/tai kai12au.html>>2012年9月30日閲覧.

マツモト ヒロノリ (修士課程2年)・カクハマ ヒトミ (修士課程2年)

地域日本語教育実践研究
実践研究(1)報告集 2012 年度春学期
(通巻 7)

発行日 2012 年 10 月 31 日
発 行 早稲田大学大学院日本語教育研究科
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14
編集責任 池上 摩希子